石川鴻斎『夜窓鬼談』に係る二三の書誌的事項について

池田一彦

かのラフカディオ・ハーン＝小泉八雲の『怪談』の粉本の一つとしても知られる石川鴻斎の『夜窓鬼談』を筆者はたまたま六点（実質、以下に述べる四種）架蔵しているが、今それについて見るに、同書はこと出版年月日に関しておおよそ次の三系統四種に分類できるもののようである。

㈠　初版　全一冊

・明治二十二年八月十日印刷　同年九月八日出版
・著作者　愛知県平民　石川鴻斎（東京芝区片門前二丁目十四番地）
・発行者兼印刷者　東京府平民　吾妻健三郎（同日本橋区葺屋町六番地）
・印刷所　東陽堂（同日本橋区葺屋町六番地）

○これは、大本の縦長本で康熙綴じ、薄茶布表紙装で、筆者所蔵の二冊の内、一冊は中央に堅目の紙で原題簽を貼り付けた厚手の楮紙（奉書紙）のカバーが付いている。見る限り、元からあった袋をカバー仕立てにしたと言うより、あらかじめカバーとして付されたもののようで、書物本体を包んで表・裏約二・五センチメートルずつ内に折り込んである。面白いのは、カバーと本体が上下ズレないようにカバー折り込み部の下部にだけ同質の楮紙で受けの宛てがい部分が設けられていることだ。縦に十センチメートル（表部）、五・五センチメートル（裏部）の長さのバラツキは却って出版元の仕業でなく当時本書の所有者の手当と見ることもできようが、そしてそれら短冊型の紙を中程で折り曲げカバーの折り込み部に二箇所簡単に糊で貼り付けただけの工夫ではあるのだが、これはこれで十分今日的なカバーの在り方を先取りしていると思われる。そのカバーの方は、表の題簽の右横に「石川鴻斎著　挿入画穂菴、楓湖、永濯」、裏には「明治二十四年仲秋東京　東陽堂印刷舗ヨリ購」の各二行と中央にやや大きめの「那波喜助」なる購入・所蔵者の署名が墨書されている。書物本体の題簽と同じ板下にかかるカバー中央の原題簽は明らかに版元の東陽堂が発行したものと認められるが、以上述べて来たカバーの方はどうであろうか。或いは、その元はやはり「袋」として出そうとしたものであったのか、初めから「カバー」仕立てで売り出した物であったのか（とすれば、我が国、近代文献の「カバー」付き書物の売り出しのかなり早い頃の物という意義も出てくるのであるが……）、今手元に在るこの初版カバーに他の折り線の見えないことのみ記して、他日、識者の御教示を俟ちたいと思う。

○内容は、自序、凡例、鬼字解、目録を冒頭に据え、「哭鬼」から「鬼神論下」まで全四十五編を収める。[1]内題次行には「石川鴻斎戯編」とある。先述したが、（平福）穂菴、（松本）楓湖、（小林）永濯による口絵一

葉（見開き二頁、文机に向かう鴻斎座像と題言）、挿絵全十七葉（その内、「画美人」のみは一葉で本文中表裏の一頁半を占めるが、他は全て一葉一頁で二葉ずつ背中合わせで袋綴じにされてある）入り。全点細密な石版画である。本文は「画美人」までの本文と挿絵を合わせた二十四頁に続く「天狗説」からまた改めて一頁と頁数が起こされており、最後の「鬼神論　下」の二十七頁で終わっているので、全部で実質五十一頁である。因みに挿絵に頁数は打たれていない。

㈡　再版　上下二冊（これは、正確には、上巻再版と下巻初版の組み合わせと見るべきものであるが、今これを仮りに再版として一括した。）

・上巻　明治二十二年八月十日印刷　同年九月八日出版　同二十六年八月三十日再版、下巻　明治二十七年七月廿一日印刷　同年七月廿四日出版

・著作者　愛知県平民　石川鴻斎（東京芝区片門前二丁目十四番地）

・発行者兼印刷者　東京府平民　吾妻健三郎（同日本橋区葺屋町六番地）

・印刷所　東陽堂（同日本橋区葺屋町六番地　電話四百八十七番）

・発売所　東陽堂支店（同神田区通新石町三番地　電話九百七十番）

○これは、㈠の初版を再版して上巻とし、新たに下巻一冊を加えたもので、共に半紙本の縦長本の明朝綴じ、光沢ある黄色表紙で装われている。上巻の内容は㈠に同じ。但し本文の組み方が、㈠の初版で縦一行四十一文字横十八行だったものが、㈡の再版では縦一行三十七文字横十五行と書型の変化に応じて変わっている。

本文の収録順も、「目録」と異なり、再版は、「雷公」と「風伯」が「売醴女」の前に来ており、「源九郎」と「孤児識父」の順が逆になり、またなぜか「高秀才」が「一目寺」の直後に「轆轤首」以下の六作を飛び越えて据えられているという異同がある。しかし、もっと大きく変わっているのが挿絵の方で、同じ石版画でも初版で口絵と「画美人」の一葉を除き全て一葉で一頁を占めていた筈の挿絵が、再版では各々見開き二頁分を占めるように横に幅が広がっているのである。極めて大雑把な言い方をすれば、人物・鬼・妖怪の類やその登場している背景や場面など諸々の事物はほぼ㈠の初版と㈡の再版で変わらないと言っていいのだが、如何せん、その個々の物の配置の間隔が再版では大きく横に引き延ばされた感が有る、とでも言っておこうか。数例を図を付することによって示したく思う。版下（原画）の図柄を初版と共有しつつ、版そのものは新たに版を起こした、いわば改版であると言って良いだろう。因みに、初版と再版では、その「画題」の文字も変わっており、墨刷りの按配や濃淡も微妙に違っている。更に、細かいことになるが、初版は「華神」（目次・本文では「花神」）および「画美人」とも（楓湖の）墨刷りの落款印のみ、再版は「華神」は同じだが「画美人」は普通の文字落款と朱の落款印になっている。また、「轆轤首」は文字落款自体をなぜか欠いている。他に「大原維蓮」「仲俊斃怪」の落款印、「冥府」の文字落款、落款印、「怨魂借体」「河童」の落款印が、初版と再版で異なっており、初版で「画美人」の前に「大原維蓮」の挿絵が置かれていたのも、再版では本文の順通り正しく前後の位置が入れ換えられているということもある。本文は全百二頁。こちらは、初版と違って挿絵にも頁数が打たれている。

○下巻は、「雪泥居士」の序、目録を冒頭に据え、「神卜先生」から「混沌子」まで全四十二編を収めるが、[2]

こちらは内題次行に「石川鴻斎戯著」とあり、内題および尾題には「東斉諧　一名　夜窓鬼談」と見えることに注意してよかろう。「斉諧」は「古書の名。昔、斉の国に行われた怪談を記したもの」（『角川大字源』）の由だが、下巻のみに見られるこの書名「東斉諧」は、或いは、この一冊だけで単独に刊行しようとの意図の版元と著者に全く存することの無かったものか、この辺いろいろと考える余地も有りそうだが、どの道、上巻即ち㈠の初版の続編としての位置を下巻が占めるのは間違いないのだから、今は注記するに留めておく。米僊による挿絵全十五葉入り、全て見開き二頁のものである。その内、なぜか「阿多摩池」のみは頁数の打たれない見開き二頁のそれぞれの裏が白紙のもので、これは後から二枚の挿絵紙が挿入されたものと考えられる。本文全百十二頁。

○実は、この㈡の系統と先の㈠の初版の系統との間にもう一種、別の出版形態を有した物が存するのだが（後述）、そちらを㈡の〔甲〕、右に既に述べ来った物を㈡の〔乙〕と便宜上呼び分けて置きたい。

㈢　重版　上下二冊（これも、正確には、㈡の再版の上巻に同じく下巻の二版（ママ）を取り合わせたものだが、今これを仮りに重版とした。）

・上巻　奥附は㈡の上巻に同じ、下巻　明治二十七年七月廿一日印刷　同年七月廿四日出版　同三十六年十一月一日二版発行

・（下巻）著作者　愛知県平民　石川鴻斎（東京芝区片門前二丁目十四番地）

・発行者兼印刷者　東京府平民　吾妻健三郎（同神田区駿河台袋町十二番地）

・印刷所　東陽堂（同神田区駿河台袋町十二番地　電話本局四百八十七番）
・発売所　東陽堂支店（同神田区通新石町三番地　電話本局九百七十番）

○これは、㈡の上巻に下巻の「二版」を取り合わせ、渋味のある緑色の模様表紙に装い替えしたもので、上巻は基本的に㈡の再版にそのまま手を加えずに下巻の二版と時を同じくして刷り増しした物と考えられるが、挿絵の文字落款と朱の落款印に若干の異同が見受けられる。この版も二組所蔵しているが、片方は、㈡の上巻と同じく「華神」が墨刷りの落款印のみなのは㈠の初版に同じであるが「轆轤首」の文字落款自体を欠いた上で更に「仲俊艶怪」と「河童」の落款印を欠いている。そして、「画美人」「羅漢」「冥府」の落款印は㈡の上巻とは異なったものである。もう片方のものは、「華神」「轆轤首」の落款を右と同じくしながらも、こちらはなぜか「華神」の画題自体を欠いている。画題の削られているのは、この一冊のみである。下巻の二版の挿絵の方はと言えば、米僊の文字落款はそのままだが朱の落款印の方は全て省かれているのが特徴的である。所蔵する二組とも、「果心居士」が㈡の下巻の「阿多摩池」同様、良質のクリーム色の薄い洋紙で本文当該箇所に差し挟まれているが、㈡の下巻と異なり、「果心居士」の方も頁数の打たれない裏が白紙の独立したものとなっており、その分、㈡の下巻本文の頁数が「二十四」「二十五」だったものが二版では「二十二」「二十正（ママ）」と飛んだ形で改まっているのが細やかな異同と言えるだろう。

以上、出版年月日順に『夜窓鬼談』の一冊本であった初版から二冊本となった再版、重版と見て来たわけだが、大きく三系統立てた内、㈡の〔甲〕と便宜上名付けておいた一組の『夜窓鬼談』について最後に触れておく。

それは、元帙入り（但し、題簽は付かず）の二冊本（？）で、上巻こそ書物であるものの、下巻の方は白い刷り物（裏返しながら「春木座第六四回興行　老女村岡九重錦」[3]と辛うじて読める）の裏を再利用して全体を包むように貼り込んだ、「夜窓鬼談　下巻」という題簽付きの光沢ある黄色表紙を貼り付けた、ただ一枚の板なのである。一見したところでは、下巻の代わりの板の大きさ・厚さもほぼ上巻に同じく、そのまま帙入りの二冊本と見紛うばかりだが、その間のいきさつは、幸いに帙内に存していた一枚の印刷物によって知られる。物の性質上、珍しいものではないかと思うので、ここに紹介し、併せて原寸の写しも掲げておくことにする。[4]「後編」とあるのは、先に見て来た「下巻」のことである。

○夜窓鬼談後編出版予告

夜窓鬼談ハ有名なる石川鴻斎先生が世に有りとあらゆる鬼魅妖怪等に就きて興味ある珍談奇話を蒐め通俗体の漢文をもて綴り童蒙婦女子にも判り易きやうに著述せられしものなり此書ハ前後二編あるを曩に前編一冊のみ早く〳〵と江湖の御推挙によりて取敢えず出版せしに文章趣向の面白きと挿入せる穂菴、永濯、楓湖三先生の絵画の妍を競ひ艶を闘はしたる筆力の優美高尚なると弊店印刷の石版画の巧妙なるとによりて非常の御好評を蒙り忽ち数千部を売尽したれバ直に文章絵画を訂正増補し一層の美観を添へて再版し又別に上等製の帙をも附したりされど其帙ハ後編をも合せて挿み得べきやうに製造したれバ後編発兌の日迄粧飾に仮りに書冊に擬したる板を挿み置きたりその後編の原稿ハ目下印刷中にして挿画ハ久保田米僊先生亞米利加漫遊中に揮毫せらるべき約あれバ遅くも二三ヶ月内には発兌の期に至るべし大方諸君希くば版元の微意を酌ん

で後編をも前編同様に御愛顧を願ふ左すれバ雌雄一帙に納まり例へバ前編の花聟ありて後編の花嫁盛粧して輿入を済まし月と花とを斉しく観覧せらるゝが如き快あるべし敢て請ふ御贔負御評判を賜はらんことを

発行所　東京日本橋区葺屋町六番地本店
同　神田区通新石町三番地支店（電話四八七九七〇）東陽堂

手元のこの一点、上巻には漢籍の蒐集家として著名な「栄郭斎」の蔵印[5]がある。（了）

注

（1）内容は以下の通り。

哭鬼　笑鬼　瞰鬼　貧乏神　七福神　花神　奇縁　売醴女　古寺怪　雷公　風伯　蛇妖　竈怪　鬼児　祈得レ金　客舎見鬼　画美人　天狗説　大原維蓮　仲兼刺レ怪　仲俊斃レ怪　興福寺僧　奇籠　毛脚　羅漢　奇陶　源九郎　孤児識レ父　狐誑酒肆　冥府　怨魂借體　河童　一目寺　轆轤首　大入道　驚狸　鐵蕉精　髑髏　牡丹燈　高秀才　狸怪　宗像神祠　続黄粱　鬼神論上　鬼神論下

（2）内容は以下の通り。

神卜先生　役小角　安倍晴明　葛葉　果心居士　貍技　縊鬼　阿絹蘇生　岩淵右内　友雅　累女　比翼塚　茨城智雄　象義猫　洋狗　秦吉了　蟻城　小人　瀧蔵　藤生救雀　飛鼎　熊人　霊魂再来　禮甫　変成男子　酔石生　染女　千葉某　飛鶻菴　保全法奇験　靄厓花卉　貍陰嚢　阿菊　偽情死　鼈成仏　阿岩　文弥　患歯　阿虎并三巳女　阿多摩池　混沌子

（3）明治二十六年五月二十四日から興行された（伊原青々園『歌舞伎年表』に依る）。

（4）紙自体の大きさは、縦十三・五センチメートル、横二十一・八センチメートルである。

（5）中野三敏編『近代蔵書印譜』二編（昭和六十一年一月　青裳堂書店）に依ると「筒井喜一郎　奈良県筒井の酒造家。『佐

保姫』醸造元なりという。近世邦人漢詩文集の大蒐集家。沖森書店によってその遺書が売立てられた。」と見える。

追記：以上、見られるように、本稿では東陽堂の所謂「文章絵画を訂正増補し」た「文章」の方の異同には詳らかに触れなかったが、概ね細かい字句の異同に過ぎず、むしろ特徴的な点として、初版の方が熟語の左に多くの傍訓を付されていること、再版でそれがかなり削られていることを記しておくべきかと思う。

なお、末筆ながら、本稿を草するにあたり、本学の杤尾武、宮崎修多両氏の御教示を得ましたことをここに書き連ね、併せて感謝の意を表したいと思います。

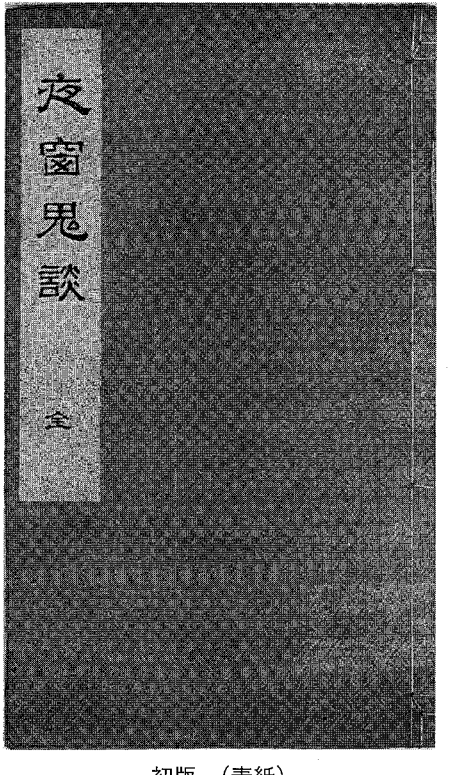
（平十六・二）

○夜窓鬼談後編出版豫告

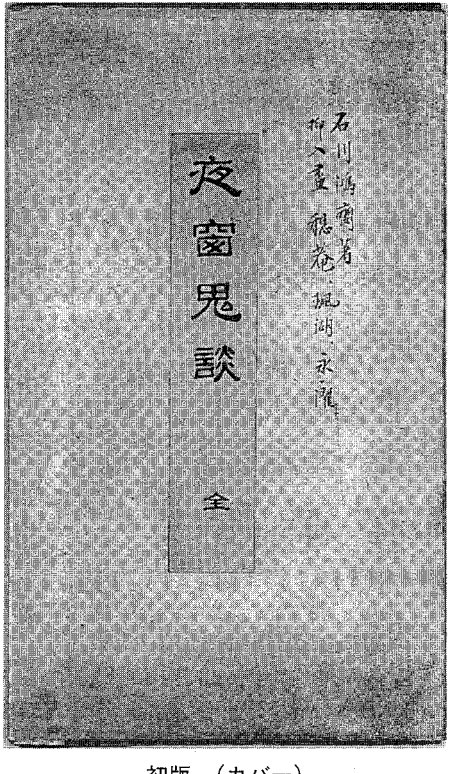
夜窓鬼談ハ有名なる石川鴻齋先生が世に有りとあらゆる鬼魅妖怪等に就きて興味ある珍談奇話を蒐め通俗体の漢文をもて綴り童蒙婦女子にも判り易きやうに著述せられしものなり此書ハ前後二編あるを曩に前編一冊のみ早く〳〵と江湖の御推擧によりて取敢えず出版せしに文章趣向の面白きと挿入せる穂菴、永濯、楓湖三先生の繪畫の妍を競ひ艶を鬪はしたる筆力の優美高尚なると弊店印刷の石版畫の巧妙なるとによりて非常の御好評を蒙り忽ち數千部を賣盡したれバ直に文章繪畫を訂正增補し一層の美觀を添へて再版し又別に上等製の帙をも附したりされど其帙ハ後編をも合せて挿み得べき

附したりされど其帙ハ後編をも合せて挿み得べきやうに製造したれバ後編發兌の日迄粧飾に假りに書冊に擬したる板を挿み置きたりその後編の原稿ハ目下印刷中にして挿畫ハ久保田米僊先生亞米利加漫遊中に揮毫せらるべき約あれバ遲くも二三ヶ月内には發兌の期に至るべし大方諸君希くば版元の微意を酌んで後編をも前編同樣に御愛顧を願ふ左すれバ雌雄一帙に納まり例へバ前編の花聟ありて後編の花嫁盛粧して輿入を濟まし月と花とを齊しく觀覽せらるゝが如き快あるべし敢て請ふ御贔負御評判を賜はらんことを

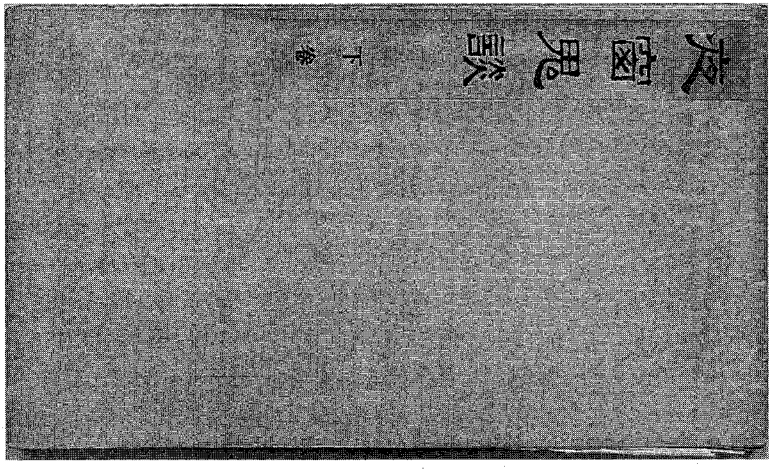
發行所　東京日本橋區葺屋町六番地本店（電四八七）
同　神田區通新石町三番地支店（話九七〇）東陽堂



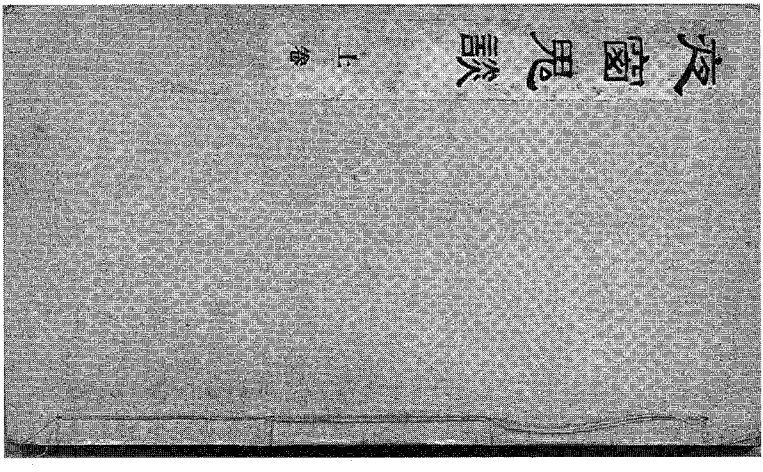
初版　（表紙）



初版　（カバー）



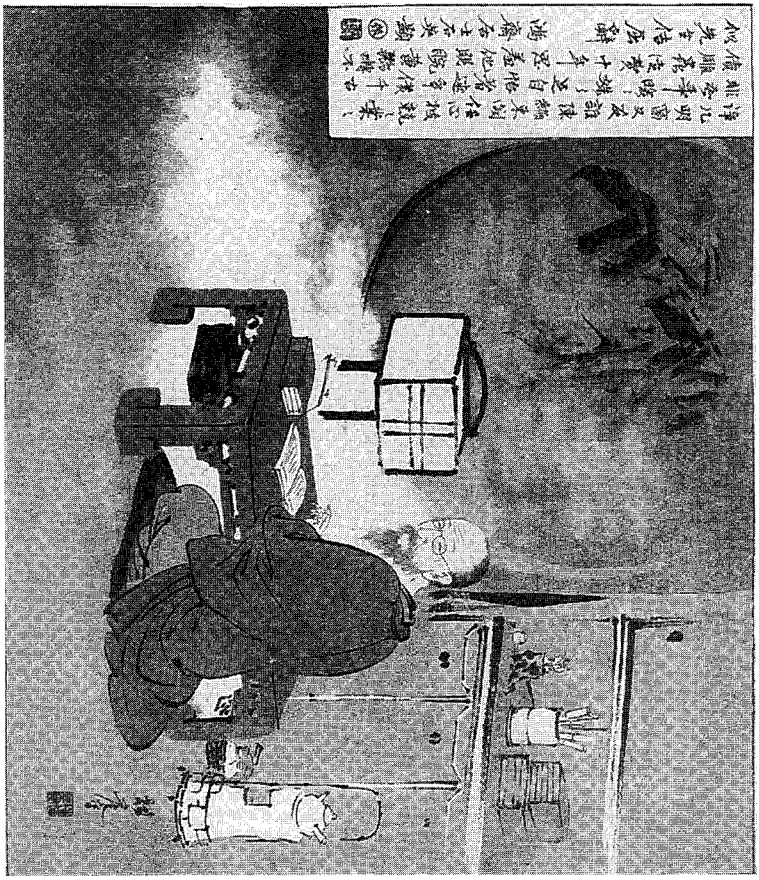
再版　表紙(下巻)



再版　表紙(上巻)

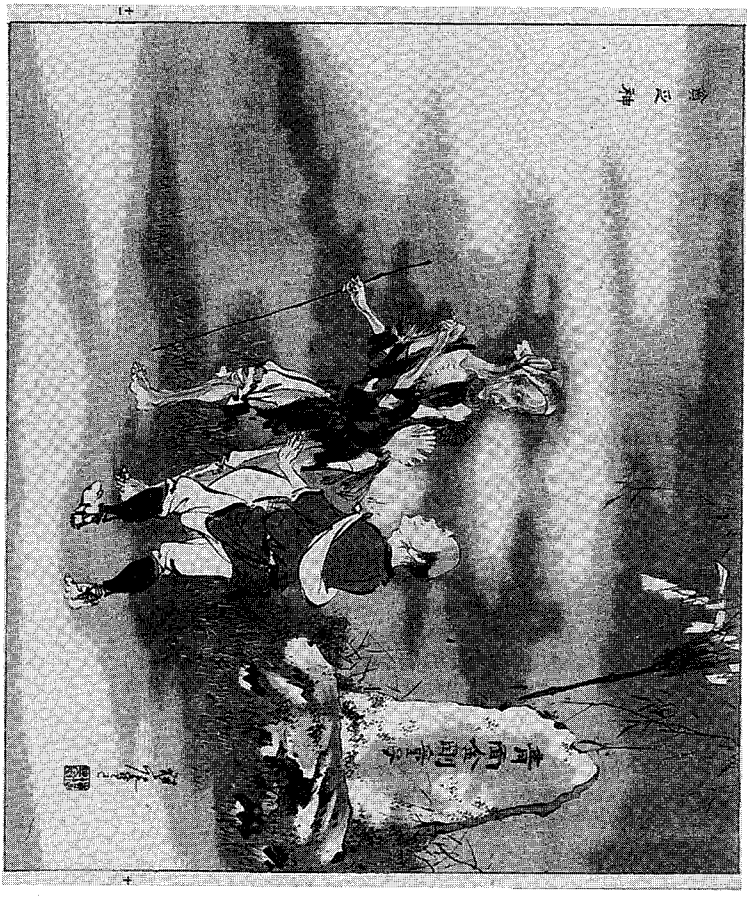
淨几明窗又反覆研究細究同仁技能業
非矛盾晦澀之自他著述字字千古
傳雕龍注釋十年思著他明晰童影嘲
似先生信原辭 湯齋石十石英翻 圖

初版



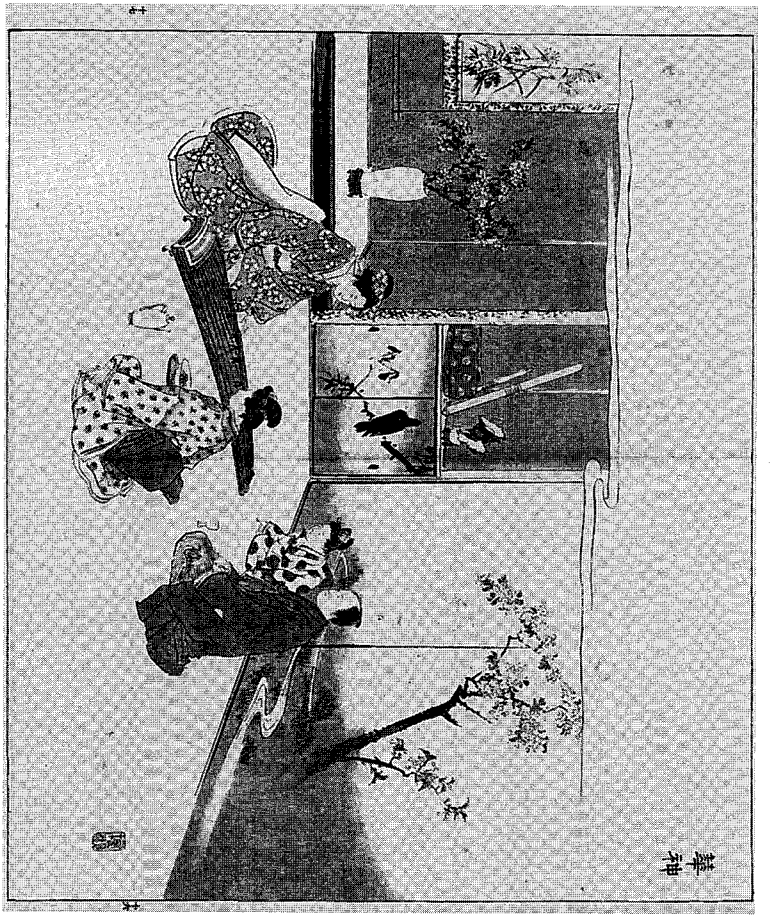
再版

初版「貧乏神」挿絵

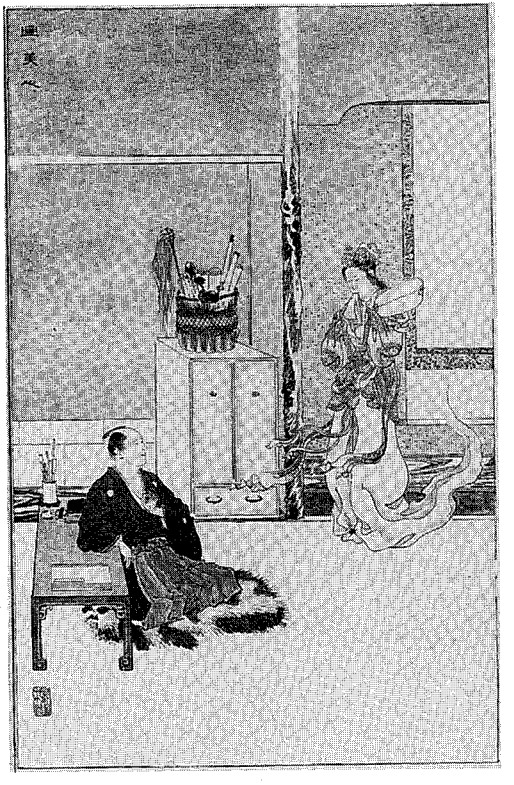


再版「貧乏神」挿絵

初版「華神」挿絵



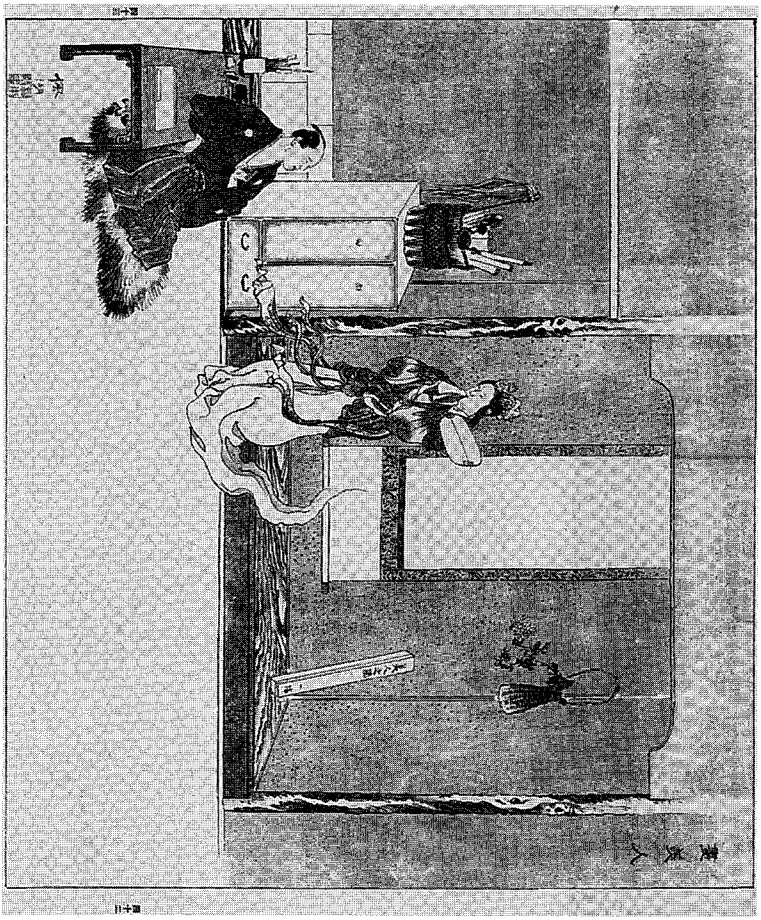
再版「華神」挿絵



初版「画美人」挿絵②

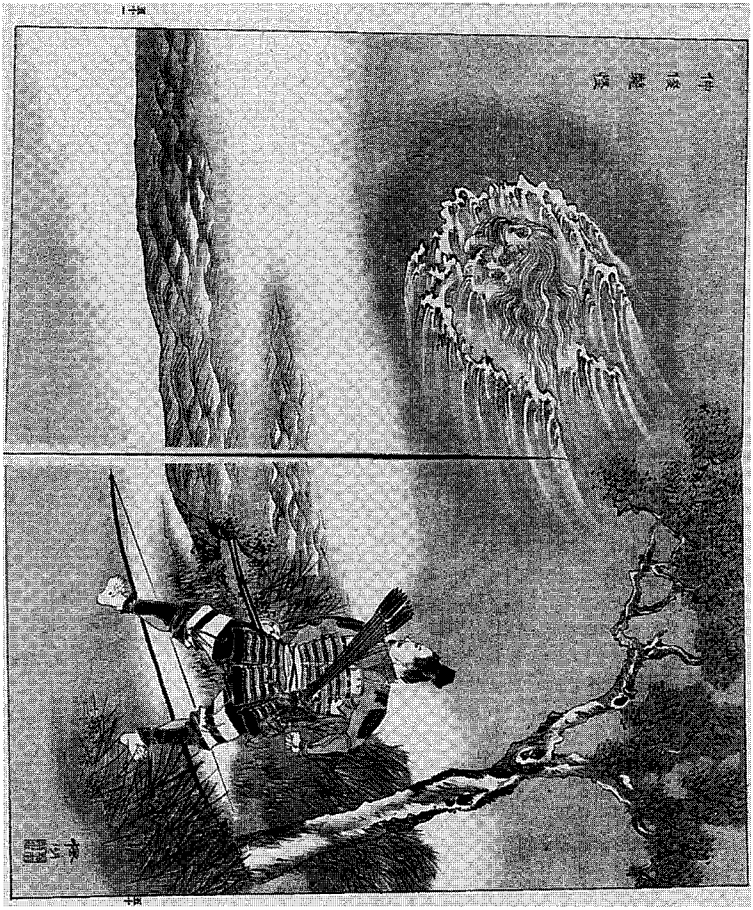
人自是無生氣彫工雖巧尋常俗畫非可甚賞者也既而卜日新婦來宛然似小脚比之畫優十倍矣世傳名畫通靈韓幹畫馬傳足求齊張僧繇畫龍翻起風雨木邦金岡元信等畫亦有相類焉者固無足信者殿名畫靈來神活動麟鳳並市龍虎與衡官不遑驅逐民亦遭害不少畫工之罪不可逃也有一戲謔近世媚家乏於佳人樓主以爲名畫來神殿得活動同人則得利不可測也試使名畫工描數多美人照獨屏列之美人靈通畫呈媚互通遊客是以廠中占魁斷日得千金同業者惡之漸知畫美人欲以破其策又使畫工使描數隻飢虎臨張哪一時放之嗚哮狂跳畫昭之至樓主小厮無有不遭吁乎畫之通神一至此歟可畏哉

初版「画美人」挿絵①



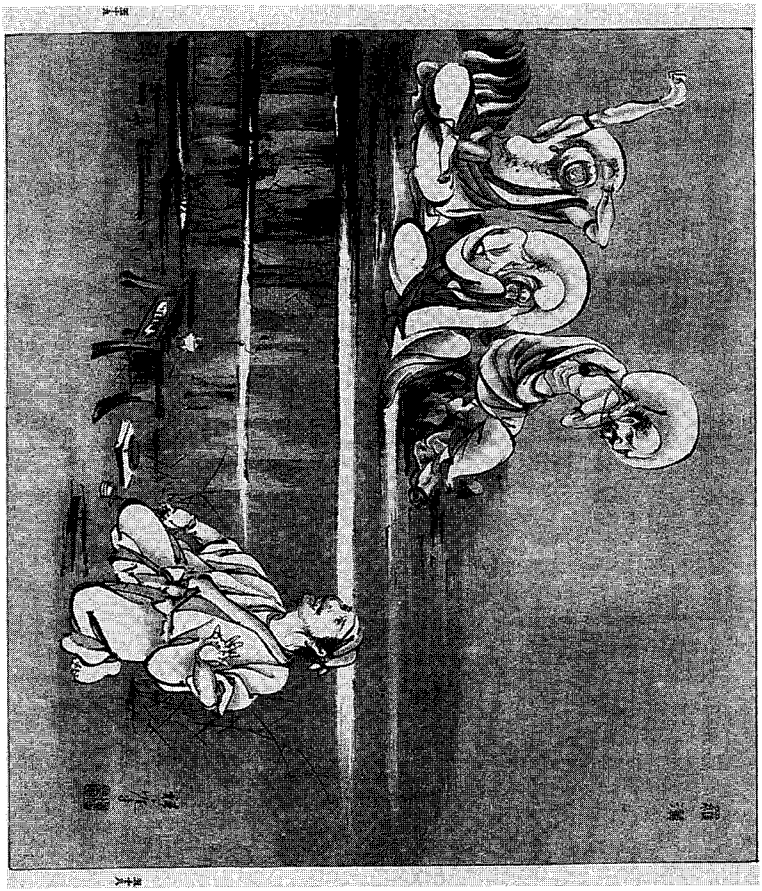
再版「画美人」挿絵

初版「仲兼艶怪」挿絵

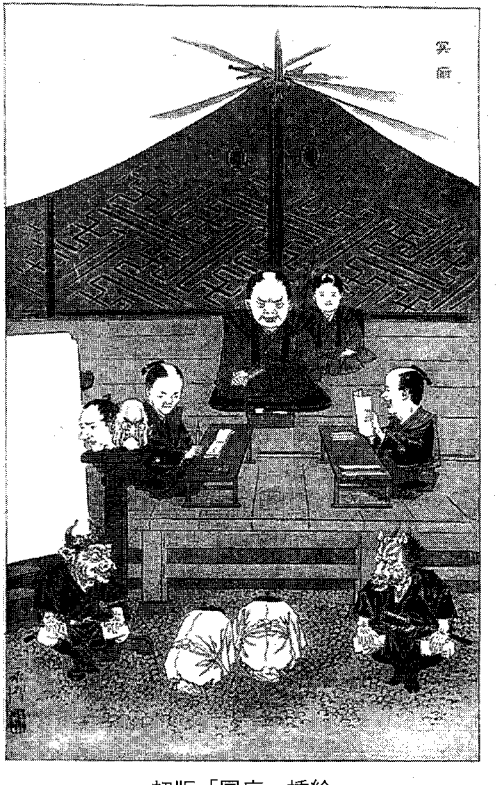


再版「仲兼怪談」挿絵

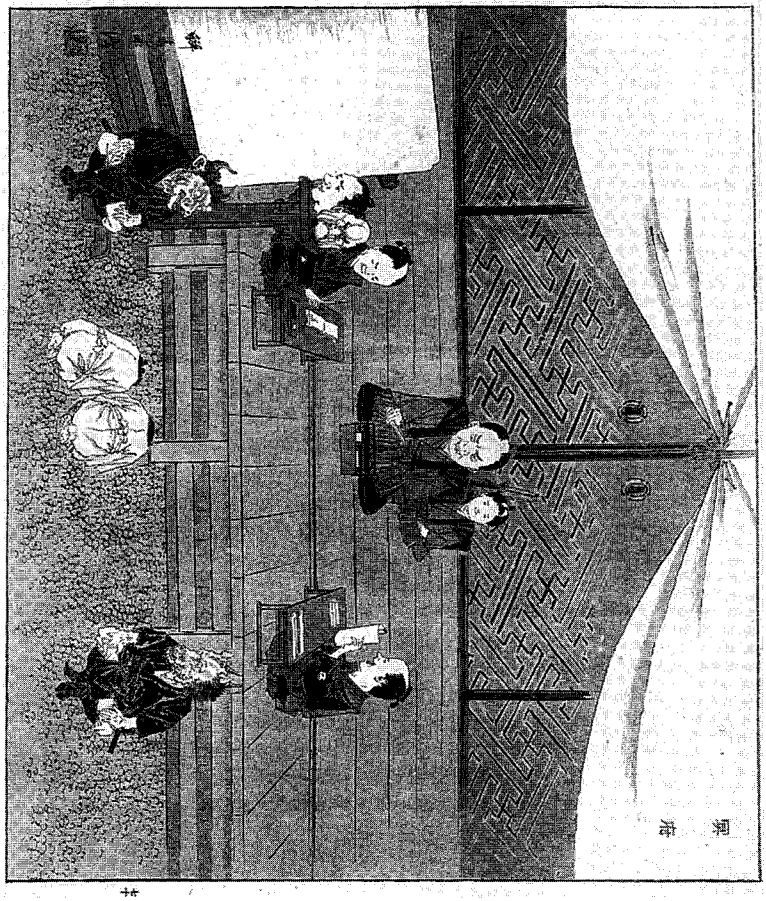
初版「羅漢」挿絵



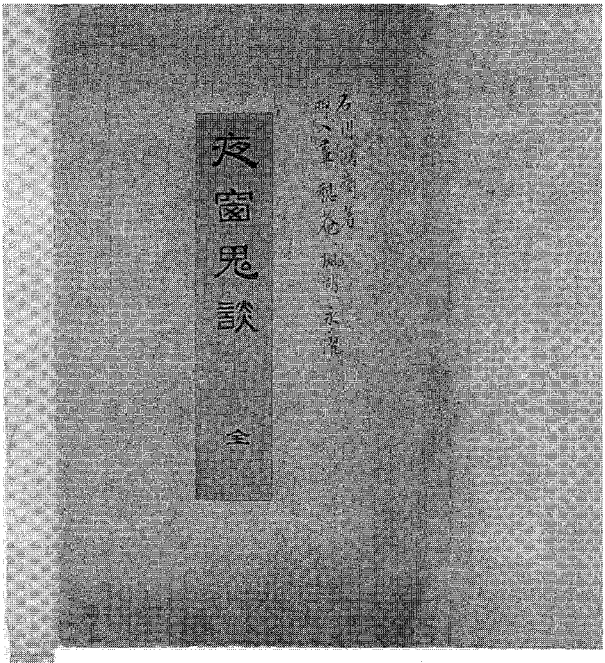
再版「羅漢」挿絵



初版「冥府」挿絵



再版「冥府」挿絵



◀〈補〉初版カバー折り込み部　下部宛てがい部分